

キャロライン王妃事件をどうとらえるか

——イギリス王室と民衆・世論——

古 賀 秀 男

はじめに

キャロライン王妃事件をどうとらえるか

一八二〇年は、一月に即位した夫ジョージ四世から長らく排斥され、離婚を迫られているキャロライン王妃を擁護する運動が、中流階級と下層民衆の改革派、急進派を中心に女性を含む広範な国民大衆を結集して熱狂的に燃え上がったときであり、本来は王室内の私的な事柄であったものが、国をあげての一大政治的、社会的事件となったときである。この出来事に「キャロライン王妃事件」(Queen Caroline affair)という呼称を最初に用いたのはG・M・トレヴェリアンとされているが、「キャロライン王妃運動」(Queen Caroline agitation)とすべきという主張もある。同時代の急進派の評論家ウィリアム・ヘイズリットは、その状況を「大衆の感情をこれほど徹底して興奮させたことは今までに覚えがない。それは国民の心の中に突然根っこを突き込み、王国内のあらゆる住宅や小住居に入り込み占拠した。……商売はそっちのけになり、人々は楽しむことを忘れ、彼らの食事さえ二の次になって、王妃の裁判「貴族院による」の結果がどうなるかということだけしか考えなくなった。……それは国内の津々浦々まで広が

り、王国全体に野火のように広がった。大衆の心は電撃的興奮に包まれた」と記録し、王妃派の論客ウィリアム・コベットは「しばしの間、イングランドのあらゆる会話と文章を牛耳った」と述べた。

父ジョージ三世とは対照的に、浪費家、遊び人で多大の借金を議会に肩代わりさせ、女性関係も賑々しかったジョージ四世(皇太子、摂政)は、過去を清算するべく従兄妹のキャロラインを正式な妃に選んだ。翌一七九六年一月王女シャーロットが生まれた後夫妻は別居し、キャロラインは王室から遠ざけられ、失意の彼女は一八一四年に大陸へ移った。一八二〇年、王妃の地位を求めて大陸から帰国した同妃に対して、国王は頑なに拒否し、不貞を理由に貴族院による裁判を通して法的な離婚を推し進め、王室から排除しようとした。王妃を支持する動きは、ここに親王妃運動(pro-Caroline agitation)として、「虐げられてきた王妃」(injured queen)を擁護する形で激発したのである。急進派のコベットやトマス・ウーラーが自らの雑誌で論陣を張り、帰国した王妃を歓迎する群衆は「王妃万歳」などのシュプレヒコールで迎え、王妃を支持する一般民衆や女性たちの署名も各地から続々寄せられた。また有力政治家ではウィッグ派の法律家ブルーム卿や

トマス・デンマンが王妃の法律顧問として活躍し、ロンドン市長・庶民院議員マシュー・ウッドも熱烈な支持者であり、国民の圧倒的多数が王妃支持であった。だがキャロライン自身も大陸でのスキャンダルが噂になり、ジョージ、キャロラインの両者を揶揄した風刺画も数多く出回り、世論をかき立てた。それではなぜ、親王妃運動がこれほど国民的関心と支持を引きつけ、政治改革や急進主義の要求とも結びつき、一大政治的、社会的事件となったのだろうか。それはナポレオン戦争終結後の不況と失業苦による社会不安を背景にして高揚し、「ピターラーの虐殺」（一八一九年八月）をも引き起こした一連の政治改革・議会改革運動の潮流の延長上に位置するものであろうか。

この出来事は「歴史家を悩ませ」ており、それを「政治的に読み解くのは難しい」と指摘されている。^⑤ イングランド労働者階級の形成史を追求したエドワード・トムプソンは、「われわれは王妃を支持するばかりの行動について探求する必要がある」と言い切り、「それは急進主義運動（同時に親国王派の運動）のあらゆる弱点を最も大規模にさらけ出した。（急進主義の観点から見た）この出来事の榮譽は、それが古い腐敗した体制を最も滑稽な防衛的姿勢に追い込んだことであつた^⑥」と述べ、ブルームらの影響が大きいこの運動は、一八二〇年代の中流階級功利主義者やウィッグの新世代が主導する新しい運動の前兆をなす、ととらえた。しかし後になって、ロンドンの船大工ジョン・ガストや靴職人ベンボウら急進派の職人や労働者が、キャロラインを急進主義のヒロインとみて熱心に支持した状況を実証的に明らかにしたプロザローの研究に注目し、最初の見解を修正した。^⑦ さらに近年では後述するように、政治史、政治運動史ないし民衆急進主義史的

な枠組みではなく、脱階級的民衆史からとらえるポピュリズム史的解釈ないし「世論」の役割を重視する見解、運動が高揚した有力な理由をこの事件のドラマ性に求める見方、さらに親王妃運動が性の二重規範に批判を向けたことを重視する女性史の視点、あるいは王族の男女関係にも堅実な中流階級的モラルを要求した運動ととらえる見解、なども出されている。こうした研究の進展・展開に、近年における女性史研究の盛行と「チャールズ・ダイアナ妃事件」が少なからぬ影響を与えている。

本来は王室内の夫婦間のトラブルにすぎないものが、なぜ朝野を揺るがせた大騒動になったのか。本稿ではまずこの「事件」の概要に触れ（事件の詳細な考証は他に譲る）、最近四半世紀の間に大きな進展をみせているキャロライン王妃事件の研究を検証しながら、この事件をどうとらえるべきかを考えてみたい。

一 キャロライン王妃事件

(一) 不幸な結婚

この「事件」はキャロラインとジョージとの不幸な結婚に端を発した。キャロライン・アメリカ・エリザベス（Caroline Amelia Elizabeth）は一七六八年五月一七日、ブラウンシュヴァイク・ウォルフエンブッテルのカルル・ウィルヘルム・フェルディナンド公とアウグスタ公妃の次女として生まれ、ハンノーファー（ハノーヴァー）の東四〇キロほどの小公国ブラウンシュヴァイクで育った。母アウグスタ妃はジョージ三世の一歳上の姉、キャロラインと夫ジョージ四世は従兄妹であった。^⑧

キャロラインは武人の父と家庭的な母のもとでかなり厳格に育てられた。同地に滞在したフランス人バロン僧正によると、二一歳の彼女は「素朴に、自分は喜んで普通の商店主の娘の境遇に変わりたい思い込んでいる。……服装や容姿はいつも盛装しているが、ダンスを踊ることはまったく許されていない」という、自由を求める心情が鬱積した箱入り娘であった。私教師の伯爵夫人のもと、フランス語、ドイツ語を学び、古典文学、シェークスピア、詩、小説、備忘録、歴史書を広く読み、ピアノもたしなんだ。活発な生き生きした目の持ち主であり、九四年八月に縁談がまると、二六歳の彼女は直ちに英語の特訓を始めた。

ジョージはキャロラインとは六歳違いの一七六二年八月二日生まれ、少年時代から勤勉とはほど遠く、宗教心も薄く、快楽を求める傾向がみられた。一六歳から歳上の女性に熱を上げ、女優メアリ・ロビンソン夫人には時期が来れば二万ポンドを渡すとさえ約束した。シャーロット王妃との堅実な生活を守ってきた父ジョージ三世は激怒したが、自ら息子の金銭の始末をつけた。成人した皇太子は、ウィンザーの居室のほか、ペル・メル通り南側の祖母の旧宅カールトン・ハウス(Carlton House)に居を与えられ、以後この邸宅の増築、調度品や庭園の整備に膨大な資金をつぎ込んだ。ダンディで派手好きな生活は一層高じ、年六万二千ポンドの下付金では足りず、二一歳ですでに一六万千ポンドの借金があった。議会はこの額の返済支出をししぶ承認した。

後にジョージが「真の最愛の妻」と語ったマリア・フィッツハーバート夫人は六歳年長、古いカトリック教徒の男爵の孫にあたり、一七

歳から二度の短い結婚で夫と死別、二人が出会ったときは、二度目の夫トマス・フィッツハーバートが残した年間二千ポンドの遺産で不自由ない暮らしをしていた。見事な金髪の気品をたたえた女性であったが、王室結婚法では王位継承権者の結婚には国王の同意が必要であり、またカトリック教徒との結婚は認められなかった。しかし二人は八五年二月一五日、ジョージの依頼を受けた牧師補ジョン・バートとマリアの叔父の立ち会いのもと、マリアの自宅でひそかに結婚式を挙げた^①。二人のことはたちまち噂になり、ピット首相ら政界首脳に悩みの種をまき、また二人の風刺画も流布した。ジョージの派手な生活は変わらず、ブライトンに展示館付き邸宅(Royal Pavillion)を構え、一時は二人で住んだ。

一七八七―八八年に国王を襲った病魔は二人の生活に転機をもたらした。ジョージをはじめ王子たち(計七名)はすべて公式には未婚であり、皇太子はフィッツハーバートを捨て、ふさわしい妃を選ぶ決断を迫られた。彼はこれまでの生活を清算し、キャロラインとの結婚を父に申し出た。ジョージとキャロラインはお互い肖像画を見ただけだった。国王はもちろん賛成した。同年十一月末には使節の外交官マームズベリー卿が、キャロラインを皇太子妃として迎えるため、ブラウンシュヴァイクを訪れた。双方からの贈り物も交換されたが、皇太子の歳上の愛人で家政を取り仕切っていたジャージー伯爵夫人の噂も伝わった。

キャロライン一行は九四年二月三〇日に婚嫁へ故郷を旅立った。出発前に、ジャージー夫人を「放蕩者で最悪の最も危険な女性」と書いた匿名の手紙が届き、父公爵はマームズベリー卿にイギリスでの父親代わりを頼んだ。戦時下で遅れ、ようやく三月二四日朝、祝砲とどろ

く賑々しい見送りを受けてハンノーファを出発した。迎えの英軍艦ジュピター号でシュターデを出発し、四月四日テムズ河口に到着、翌日正午過ぎ一行は王室ヨットでグリーンニチに上陸し、海軍救護所の長官をはじめ住民ら多数の歓迎を受けた。ここまでは皇太子妃の嫁入りにふさわしい旅であった。だが一時間ほど待たされた王室からの出迎えは皇太子の愛人ジャージー夫人であり、その馬車でセント・ジェイムズ宮殿に入った。キャロラインが姿を見せると、集まっていた群衆が歓迎の声をあげた。^①

やがて皇太子とキャロラインははじめて対面した。キャロラインは皇太子の前で膝まずいて挨拶しようとした。皇太子は彼女を抱き起こし、一言か二言言葉をかけたが、すぐに振り向いて彼女から遠く離れ、マームズベリ卿に「今日は体調が良くない、ブランディを一杯もって来てくれないか」と言い、やがて部屋から出て行った。キャロラインは取り残され、マームズベリにフランス語で「皇太子はいつもこんな風なのですか、とても太っておられ、肖像画にあるような美男ではありませんね」と語った。『タイムズ』はキャロラインの容姿について、中背よりやや低く愛らしい感じの人で、愛想が良く善良そうに見える。表情豊かな眼、整った髪、象牙のように白い歯、良い肌の色、美しい手と腕の持ち主であり、確かにまことに美人と言えよう。また上唇など確かに父国王と似たところがある、と歓迎する描写をした。

二人の婚礼は四月八日夕刻、セント・ジェイムズ宮殿の王室教会でカンタベリ大主教の司式のもと伝統に沿って行われた。『タイムズ』によると、教会の中で侍女のジャージー夫人が権限をもち過ぎていると感じたキャロラインが、夫人に手出しをしないよう要求した。列席者

たちは皆、キャロラインの立ち居振る舞いの礼儀正しさに注目した、という。^②

皇太子は初夜には酔い潰れて寝てしまい、わずか三日後に、フィッツハーバートの家に行く馬車を用意するよう指示して止められた。あゝる日の夕食後、皇太子がジャージー夫人が注ぐグラスで酩酊してしまい、キャロラインは客人のバイブを借りて蔑むように夫に吹きつけたことも。この「皇太子の不良仲間〔ジャージー夫人〕は……いつも飲んだくれてみだらで、ソファアの上にブーツのままいびきをかいて眠った」という。このような新婚生活は実家の両親を心配させ、母親は弟ジョージ三世に娘が私的、公的の両面でつつがなく務めを果たすよう指導を頼んでいる。

一方、祝賀行事も行われた。婚礼の数日後には夫妻でウィンザーを訪問し、四月一六日の午後、セント・ジェイムズ宮殿において国王夫妻をはじめすべての王族、有力貴族とその夫人、政官界の有力者、カンタベリ大主教ほか教会の有力者、外国の大公使、多数の貴婦人が出席した壮大な結婚祝賀会が行われた。ロンドン市による祝賀行事も行われた。キャロラインは五月に、皇太子の邸から義理の妹エリザベス宛に「私はこの国に来て十分満足し幸せにしています。……もう乗馬はしませんが、皇太子がオープン馬車で外に連れて行ってくださいます」と幸せそうな手紙を書いた。この手紙は皇太子が書かせたものともみられているが、すでにキャロラインは懐妊していた。議会はキャロラインに年額五千ポンドを支出することを決めた。^③

皇太子とキャロラインは六月中旬から一月末の間ブライトンの別荘パヴィリオンで過ごした。ジャージー夫人、チョーモンデリ夫人が

同行した。皇太子は母宛に、彼女はここが大変気に入っている、身重にともなう不調のときを除いて彼女は心身ともに最も良い状態なので、完全に仲良くしていけるように思う、と書き送っている。しかしキャロラインはドイツの友人宛に、不満を書き、ジャージー夫人は嫌い、夫は彼女にはお手上げの状態です、と書いていた。しかも滞在中に、夫や王妃への不満も綴った実家宛のキャロラインの手紙をジャージー夫人が開封し、英王室の人々に見せてしまうという事件が起こった。非難はジャージー夫人に集中し、同情は身重のキャロラインに寄せられた。彼女の飾らない闊達な人柄は王室の望む妃像とは一致しなかったが、ジョージ三世は彼女の快活さが気に入る、国王は王室内で唯一人の理解者であった。

一七九六年一月七日朝九時過ぎ、キャロラインはカールトン・ハウスで女子を出産した。ロンドン塔からは祝砲が打ち上げられ、翌日はお祝いの人々の馬車で周辺は終日混雑した。女兒は二人の祖母の名を取ってシャーロット・オーガスタと命名された。誕生の数日後、皇太子は飲み過ぎのせいか死期が迫ったと錯覚し、三千語もの遺書を書いた。その中で「皇太子妃と言われている女性に一シリングを残す、マリア・フィッツハーバートにわが全財産を与える」、キャロラインには子供の養育にいつさいかかわらせない、と記した。皇太子の本心が吐露されたものであった。まもなく皇太子はまたジャージー夫人を邸に招き入れた。

(二) キャロライン王妃事件の展開

シャーロットはすくすくと育っていたが、皇太子夫妻の間は冷めて

いった。皇太子は自分似の娘はかわいがったが、キャロラインとは顔を合わせるのを避け、夏期にはブライトンに住み、妃のことは顧みなかった。キャロラインは娘と一緒に別の場所で暮らしたいと考えたが、皇太子は認めなかった。キャロラインは九八年初めからグリーンチ地区のブラックヒースに面したモンターギュ・ハウスに移り住んだ。大法官サーロー、ハミルトン公夫妻などの高官から近隣の人々まで多くの訪問者があり、やがて数人の孤児を養育するホームも開設して彼女はようやく生氣を取り戻した。孤児の一人ウィリアム・オースティン少年をかわいがり、後に養子にする。ただシャーロットは皇太子の手に置かれ、簡単には会えなくなった。一方皇太子はジャージー夫人が妨害するなかでフィッツハーバートとのよりを戻した。ローマ教皇は教会の法により彼女を皇太子の公式の妻と認定したが、事態は変わらなかった。後にキャロラインは自分の不幸はフィッツハーバートの夫と結婚したことです、と語っている。皇太子はキャロラインを徹底して避け、彼女の家を訪ねた者はカールトン・ハウスに入れないうことにした。娘シャーロットは別の家で育てられた。

一八〇五年、一つの事件がモンターギュ・ハウスの隣人ダグラス海軍大佐夫妻によって起こされた。半年あまりの軍務のあとダグラスが訪ねたとき、キャロラインが会うのを断ったのがきっかけだった。ダグラス夫妻はオースティン少年をキャロラインの隠し子だと皇太子に告げたのである。皇太子はこの問題を重視し、グレンヴィル首相にキャロラインの行為を調査するよう要求した。国王もこの申し出を受け入れ、一八〇六年五月末、首相、大法官アースカイン、スペンサー卿、主席裁判官エレンバラ卿の四名からなる内密の王立委員会が設置

された。委員会はモンターギュー・ハウスの召し使い、雇い人あるいは医師など多数の証人を招き調査したが、少年はソフィア・オースティンが一八〇二年七月一日に生んだ子供と認められた。七月一日、委員会は「当の子供が妃殿下の子供であると信ずるべき根拠はない」と国王に報告した。キャロラインがこの「細心の調査」(delicate investigation)の目的を知って驚いたのは、八月のことであった。耐え切れなくなった彼女は自分を支持する意見をまとめて出版し、一部は流布した。皇太子の評判は一段と下がり、キャロラインは多くの同情者を得た。間もなく首相になるスペンサー・パーシヴァルも彼女の支持者であった。皇太子はキャロラインとの離別を考え始める^⑤。

一八一一年父三世の健康は悪化し、皇太子は摂政に就任する。大陸の戦争が一層深刻になっていた一二年五月、キャロラインの理解者パーシヴァルが議会で暗殺され、後継首相は保守派のリヴァプールになった。摂政はキャロラインを離別し国外へ追放しようと考えてようになり、彼女の非となる事実、情報を提供した者に謝金を出す計画を立て、私的な新聞で妻の行状を書き立てた。一方ウィッグ派のブルームは彼女とシャーロットに対する摂政のひどい仕打ちを非難する原稿を書き、キャロラインの名前で摂政と首相宛てに送り、『モーニング・クロニクル』にも掲載された。摂政はこれに對抗し、活発な娘に成長し人気を集めていたシャーロットを王位継承者から外そうと企て、大法官により抑えられた。この問題は庶民院でも論議され、先のダグラス事件や摂政夫妻の往復書簡など過去にさかのぼって事実が公表され、論議された。キャロラインは自らの立場を『The Book』にまとめて相次いで出版し、それがベストセラーとなり、多くの市民が支持に

動き始めた^⑥。戦争終結後の一四年六月、ロシア皇帝、プロイセン王らがロンドンに集まり、摂政が主催する祝勝会が行われたが、キャロラインもシャーロットも招かなかった。

一四年八月八日、四六歳のキャロラインはイギリスを離れ大陸へ旅立った。摂政と政府は彼女を遠ざけるため年額三万五千ポンドを出すことにした。同行者はレディ・シャーロット・リンゼイほか武官や医師、養子にしたオースティンら十数名。故郷のブラウンシュヴァイク(両親はすでに他界)をへてイタリアへ向かい、ミラノでイギリスからの付き添いと分かれ、召し使い、武官もイタリア人を雇った。オーストリアの將軍の推薦によりイタリア軍人バルトロモ・ベルガミ(Palholomo Bergami or Pergami)を雇い、「聖キャロライン騎士団」と命名してパレスティナ巡礼やウィーンへの旅をした後、一七年にはコモ湖畔に落ち着いた。こうした行動についてキャロラインは気が違った、あるいは逆に逆気ある行動という者があった。摂政の忠実な法律顧問ジョン・リーチは一行の行状についてスパイや従者の情報を入手し、摂政に報告した。離婚の口実を得たい一心の摂政の要請を受けた首相は、委員会(ミラノ委員会)を発足させた。一九年、委員をミラノに派遣し、証人喚問を行い、資料を「緑の袋」に入れて持ち帰り、七月に「ミラノ報告」を提出した。この報告を検討した委員会は、妃殿下の不貞による罪は十分立証されるところであるが、証人の大多数が身分の低い外国人であるため、その証言をもって妃殿下の罪を認定するのは法的に困難、と結論づけた。摂政は引き下がりざるを得なかった。ブルームは離婚などの措置を取らず、終身金を保証する形で国外に留まってもらう提案をしていた^⑦。

この間に父摂政に代わる期待の星となっていた王位継承権者シャーロットが、一七年一月、男児を死産した翌朝二二歳で他界した。キャロラインが離英する前に摂政はオレンジ（オラニエ）公の嗣子招き、娘との縁談を進めていたが、結婚後はオランダに住むことが相手の希望だった。摂政には娘を遠ざける考えがあり、キャロラインは娘の将来を懸念する。シャーロットは父が激怒するなかでこの縁談を断り、一六年にザクス・コーブルク家のレオポルド（のちベルギー王）と結婚し国内に住んでいた。多くの国民は「イングランドの姫君」が幸せをつかんだと歓迎し、懷妊を慶んでいた矢先のことだった。新聞、雑誌はことごとく彼女の死を悼み、詩人たちは追悼の詩を書いた。多くの国民はキャロラインの不幸と合わせてシャーロットの死を悼んだのであった。^⑧

二〇年一月国王は他界し、摂政はジョージ四世として即位した。ローマに滞在していたキャロラインは、シャーロットもなき今、王妃の地位を要求して帰国する考えを固める。首相や政界有力者、あるいはブルームでさえ王妃の地位と終身年金を保証して国外に留まらせようとし、ブルームらはカレーに渡りキャロラインを説得するが、応じなかった。王妃の帰国の足取りは『タイムズ』に日々報じられ、六月五日ドーヴァーに上陸した。街頭に出た群衆は彼女を大歓迎し、彼女が進む先々で群衆の興奮は高まった。六日グリーンニチをへてロンドンに着、市長ウッドはじめ市民の大歓迎を受けた。王妃の住居の用意がないことが明らかになり、群衆は政府当局者の邸に押しかけ、明かりをつけさせシュプレヒコールをあげた。群衆の街頭デモは連日つづいた。王妃は最初は市長、市上級議員の自宅などを点々とし、支持する

群衆が群がったが、八月にテムズ河畔ハマースミスのブランデンブルク・ハウスに落ち着いた。^⑨

強硬な国王はリヴァプール首相とはかり、一五名の秘密委員会を設け、準備してきたキャロラインから王妃の特権をいっさい剝奪し、国王との結婚を解消する刑罰法案（Bill of Pain and Penalty）を早急に成立させようとした。法案は庶民院では反対が強く審議しないことになり、貴族院が審議の舞台となった。「王妃の裁判」は本人も出席し八月一七日に開廷した。「裁判」が始まると王妃支持の運動は一段と活発になり、街頭デモ、集会、反対派の邸への襲撃などに加えて、多くの請願書が政府、議会に持ち込まれた。『タイムズ』ほか多くの新聞、急進派雑誌が王妃支持の論陣を張り、記事を掲載した。「首都の既婚婦人」による請願書には一七六五二名の署名があり、ノッティンガム（七八〇〇名）、地方の小都市セント・アイヴズ、トルアロウほか全国各地から請願書が届いた。王妃が出席した初日は早朝から群衆が街頭に集まり、「われわれには王妃が必要」「王妃万歳」などと叫び、ロンドンには王妃支持一色の様相を呈した。

「裁判」では告発（国王）側二六名、王妃側三二名の証人を喚問した。王妃とベルガミとの親密な関係を立証しようとする告発側は、証人の大部分をイタリアから招いた。七月にこの証人たちが到着したとき、激しい抗議デモに見舞われた。告発側の法務長官ギフォードら、弁護側のブルーム、デンマンらの激しい論戦が続いた。『タイムズ』は詳細な討議記事を載せ、急進派の諸誌紙は王妃支持の論陣を張り、風刺画や風刺雑誌が流布し、支持派の民衆は街頭を練り歩き、新聞を待つ地方の人々のはかたずをのんで成り行きを注視した。イタリア人証

窓 人の何人かは微妙なことになる」と「覚えていません」(Not Mi Ri-
cotto)と答えた。当初は圧倒的に国王側が多かった貴族院も審議が
進むにつれて動揺が起り、十一月六日の第二読会で法案賛成一二
三、反対九五(二八票差)、同一〇日の第三読会では一〇八対九九
(九票差)となり、首相は庶民院を見越して成立の見込みなしと判断
し廃案にした。この結末は王妃支持者を興奮の絶頂に押し上げた。

キャロラインは民衆・改革派から圧倒的支持を受けたが、夫の戴冠
式(二十一年七月一九日)にも招かれず、公式の王妃の地位は認められ
なかった。二十二年三月初めに五万ポンドの終身年金を受け入れ、支持
運動も鎮静し、同年八月八日、失意のうちに五三歳の波乱の生涯を終
えた。一四日、彼女の遺体を本人の希望によりブラウンシュヴァイク
へ護送する葬送行進が市中を通過するとき、ロンドンの民衆急進派に
よる最後の大規模な支持行動が行われ、市街地を通るよう順路を変え
させた。途中警備の軍隊と二回衝突し、軍隊の発砲により二人(家具
職人と煉瓦積み工)が死亡する事態となった。犠牲者は出したが、勝
利は民衆側にあった。民衆急進派は同二八日、この二人の大規模な公
葬を行い、七〇八万人が参加した。こうしてキャロライン王妃事件は
幕を閉じた。

二 キャロライン王妃事件をどうとらえるか

イギリス大衆を「電撃的興奮」に巻き込んだキャロライン事件は、
おびただしい数の書物、覚書、パンフレット、雑誌と新聞・雑誌記
事、膨大な量の議会討議記録、風刺画(ポルノグラフィックなものを含
む)と風刺画入り冊子などを遺した。その後一九世紀中に、関係者

の日記、覚書、自伝ないし自伝的覚書が公刊され、事実関係と興奮状
態が一層明らかになった。一方で王妃の寝室係を務めたレディー・シ
ャーロット・ベリーの『日記に基づいたジョージ四世治下のイギリスの
王室』(初版一八三八年)のように、その反キャロライン的叙述がセ
ンセーションを巻き起こし、その信憑性をめぐって激論が交わされた
こともあった。二〇世紀に入って歴史家によるジョージ四世、キャロ
ライン王妃の伝記や書簡集、あるいはフィッツハーバート夫人の伝記
も公刊された。関係資料の公刊が進むとともに、二〇世紀初頭からキ
ャロラインの伝記、評伝がイギリス、イタリアで公刊され、世紀後半
にも相次いで上梓された。とくに近年では「チャールズ・ダイアナ妃
事件」と重ね合わせて関心がよみがえり、フレイザーによる伝記『手
に負えない王妃―キャロライン王妃の生涯』のような生涯を追った労
作も公刊された。

キャロラインに焦点を合わせた評伝的研究は、イタリアの研究者ク
レリチによる評伝のように、シャーロットを私生児とまで言い切って
「みだらな」キャロラインを印象づけたものもあったが、全体として
は同時代のイギリス人の多数派と同様に親キャロライン的である。ド
キュメンタリ・タッチのスマス著『裁判にかけられた王妃―キャロラ
イン王妃事件』は、一八二〇～二十一年に焦点を合わせ、事件の実像を
浮き彫りにしようとしている。またこの事件は大量の風刺画やポルノ
まがいの風刺漫画を生み出した。それらの一部を解説付きで収録した
リックウッズの書物、マッカルマンの研究はかも注目されてよい。

それではキャロライン事件をどうとらえるか。評伝のほかに近年活
発に進められている研究はこの問題に焦点を合わせ、いくつかの新し

い見解を打ち出した。急進主義史・労働史の視点からは顧みられなかったこの事件を最初にとらえ直したプロザローは、次のように述べる。キャロラインはすでに一八一三〜一四年から、きわめて不人気な摂政ジョージⅢ「ベル・メルの豚」と対置して、人気絶頂の娘シャーロットと合わせて熱烈に支持されていたが、二〇年に大陸から帰国すると、各地で民衆が熱狂的に彼女を支持し、当初は国王への忠誠をのぞかせた彼女も、王妃としての地位は認めないという国王の主張が繰り返されると、民衆の支持を求めるようになった。彼女は「急進派の王妃」となり、市長ウッドらウィッグ改革派だけでなく、ガスト、ベンボウら労働者、職人層も王妃を支援する集会を組織した。多くの職種の職人、労働者が加わったこの運動は、政治改革の要求や政治不満を単純にそらしたものでなかった。二二年八月の王妃の葬送の際に、大衆行動によって市街地を通るよう葬列の順路を変更させたのも彼らの政治行動であった。しかし彼らは他人が設けた舞台で演じていたに過ぎず、ウィッグが彼女を見捨てるとシンボルを失い、運動はたちまち衰退するという弱点をもっていた、と。プロザローは急進派の職人や労働者たちがキャロライン支持に動いた理由とその正当性を明らかにし、この事件を避けてきたそれまでの労働史を転換させることになった^③。とはいえ、この事件は労働史上にのみ位置づけられるものではなく、またロンドン史の枠にとどまるものでもない。

この事件の評価に新たな展開を示したのは、どうして国民的な政治的・社会的大事件となったのかを説明しようとしたラカーによる初の本格的専論である。ラカーは運動の高揚を二つの側面、すなわちキャロラインを急進派のシンボル、親キャロライン運動を高揚した急進主

義運動ととらえる視点と、事件が演劇的・メロドラマ的に「美化」されたことが、運動に大きな弾みを与え国民的運動になったという視点の、両面からとらえるべきとする。そのユニークさは後者にある。前者については、「虐げられてきた王妃」への熱烈な支持は、有力貴族、貴族院の多数派が国王側につけばつくだけ、親キャロライン急進的政治改革・国民の立憲的権利の擁護という性格を明確にした。キャロラインに対する不条理な告発は「古い腐敗した体制」(Old Corruption)の復活にはかならない。急進派の象徴的存在だった老ジョン・カートライトは、王妃を救うことができれば政治的迫害から自分も、さらに国制そのものも救われるだろう、と述べたし、保守派の雑誌『ロイヤリスト』はキャロラインを「フランス革命の指導者」とまで言った。彼女のもとには数知れぬ支援・激励が各地から寄せられたが、その支援に対して、彼女自身「私が地位を失えば、あなたがたも自由を失うようになるでしょう」と答えた^④。

「潔白な王妃」と「不品行で贅沢三昧の浪費家の国王」という対比の中でキャロラインを支持する運動は、ドラマ化、美化されやすかった。キャロラインが貴族院の「裁判」に引き出されると、不幸な結婚をした悲劇の王妃のドラマはクライマックスを迎え、数知れぬ新聞、雑誌が王妃弁護の論陣を張り、大部分の庶民、女性も国が仕立てたドラマを凝視し、冤罪を負わされた悲劇の主人公に熱烈な声援を送った。事態は「チャールズ一世のとき以来の災厄が近づいている」と憂えられたほどだった。「悲劇」は人気と期待を集めていた王女シャーロットの死産・死去のときから、「国主催の演劇―離婚」(State Theatricals—The Divorce)として開幕していた。「裁判」中には

窓 数知れぬ風刺画、パンフレットや新聞が津々浦々にまで流布し、人々

史 はこのドラマに熱中して酔いしれ、キャロライン擁護の請願署名を政府・貴族院に送りつけ、イタリア人証人たちに反発し、彼らに似せてつくった人形を焼き払ったりした。親キャロライン運動の熱狂の秘密を解く鍵はそのドラマ性にある。^④

ラカーの行き届いた論述と見解はその後の研究に大きな刺激と影響を与えた。タマラ・ハントの論文もラカーの後半の論述の延長上にある、風刺画を軸に親キャロラインの熱狂とその変化を跡づけ、この事件を「イギリス文化史上の重要な出来事」とみなす。ジョージの愛人たちとのふざけた行為が国を危機におとしめる図、寝取られ男のシンボルである角を取り合うジョージ（ラカーの論文にも掲載）、シンボルの角をつけて闊歩するジョージの愛人の夫の図などの風刺画を示しつつ、ジョージら王族がいかに不品行、不道徳かが暴かれた結果、中流階級はシャリヴァリ行動にも訴え、親キャロライン運動に熱狂したと述べている。しかし「裁判」が挫折しキャロラインが迫害から放免されると、彼女は理想の庶民の妻、あるいは理想の王妃であるのか、という反省に駆られ、キャロライン熱は急速に冷めた点も指摘している。^⑤

一方、女性を私的領域に押し留めようとする中流階級的な家族イデオロギー・家族観の視点からキャロライン事件をとらえるデイヴィッド・フとホールは次のように主張する。キャロラインを支持した大衆は、歓楽に明け暮れ道徳も退廃したジョージとは正反対の、中流階級が理想とする君主像を求めており、王女シャーロットはその理想を実現し得る人物として期待を寄せた。一八二〇年には、貴族的な道徳規範や

性の二重規範を拒否し、より厳格な性慣行を擁護する代弁者とみてキャロラインを熱狂的に支持した。改革派や進歩派が彼女を支持したことは事実だが、支持者すべてが過激な急進派であったわけではなく、「尊敬されうる中流層を含むすべての人々が王妃側についた」。この事件を通じて、世論は「国王一家はまさしく家族でなければならぬ」。王と王妃は国民のための父や母であるべきだとしても、彼ら自身の家庭の父であり母でなければならぬ」と宣言した。キャロライン王妃事件は結婚と性行動に対する公衆の態度を定立させる重要な契機となり、イギリス女性の潔白性への信念と女性が美德と名誉を表すという立場を定着させた。中流階級の求める、女性には純潔、男性には騎士道にかなった節制を旨とした家庭的王室像は、ヴィクトリア女王によって実現する。^⑥

このような中流階級と結合させる見解に反対するアナ・クラークは、性関係の枠にとらわれないロンドンの平民層（*plebeians*）を軸にして、メロドラマや茶番がどのようにして政治化したのかを改めて検証し、論争の再解釈を企てる。ロンドンの商店主、小商人、職人、針子、召し使い、賃労働者、兵士、船員ら平民層にとって、この事件はまったく違った意味をもっていた。カルフーンが平民層のキャロライン支持を「伝統的な家族の価値観」を守るため、とみるのはあまりにも単純すぎる。^⑦ 彼らの中にはキャロラインを「危機に瀕した純潔の象徴」とみるものもいたが、他の多くの者は性の自由を認め重婚や同棲を受け入れ、結婚前の妊娠も日常的に受け入れていたので、キャロラインの貞操については何ら問題にしていなかった。性生活はすべての女性の健康にとって必要事と確信していた急進派の仕立て職人フラ

ンシス・ブレイスは、夫から冷たい仕打ちを受けた彼女が他の男ないし美男子と結びつくのは何ら問題ではないと述べた。レイ・ハントの『エグザミナー』、リチャード・カーライルの『リパブリカン』もほぼ同様な主張を打ち出した。ベンボウによる風刺画「毛布の上の舞踏」は、ロンドンの下層中流階級の女性たちが支えもつ毛布の上でほうり上げられるジョージを描いており、妻への虐待者に対する伝統的な女性側の復讐を表していた。王妃支持には国王と貴族院に敢然と抗議する挑戦的な妻を讃える声も加わっており、この事件は性の二重規範批判の舞台をつくただけでなく、積極的に発言し行動する女性の政治参加の可能性をも拓いた。急進派のロンドンの女性たちは王妃支援の代表団を送り、署名をした。各地の無名の女性たちは、王妃の運命を自らのものと重ね合わせ、積極的に行動した。ベンボウの大型ビラ「王妃の性格」では、彼女のイエルサレムへの巡礼を「勇敢な冒険」として讃えた。キャロライン王妃事件は、やがて新しい真面目な労働者階級の政治運動へ移行する前の、「枠を超えた手に負えない平民急進主義の最後のなばなしの突発」であった。親キャロライン派の中にある攻撃的な平民的急進主義の存在を浮き彫りにしたクラークの見解はユニークであるが、それは国王側の頑ななキャロライン排除の強行への反発でもあった。

近年の歴史家たちが反キャロライン運動を無視しているとして、国王側の対抗策を検証するのはフルチャーである。以前からの『クローリエ』『ニュー・タイムズ』『モーニング・ポスト』に加えて、『ジョン・ブル』『ビーコン』などの王党派新聞が登場し、キャロラインとその支持者たちを攻撃した。その論点・主張は、事件はあくまで王と

王妃の間の純粹な家庭内の問題である、女性には謙虚さが必要で礼儀作法を重んずべきだ、王妃とその追隨者たちを何とか飼ひ馴らそうとする、親キャロライン派に対抗して国王とプロテスタント国制を尊敬すべき存在として積極的に提示し、かつ親キャロライン派を親国王派へ転向させようとする、というものであった。フルチャーの議論は不十分なもののだが、この対急進派策は後のカトリック解放運動への対策の予行として役立った、述べている。^⑧

親キャロライン運動と中流階級とを結びつけるデイヴィッドフ、ホルらの顕著な傾向に対し、ウォールマンはジェンダー、階級、政治の三者が交錯したこの事件は中流階級のみと結合してはいない、として批判する。キャロライン支持層は地主階級から急進的労働者階級まで階層を越えて全国に広がっており、なかでも職人層が重要な役割を担った。この運動の過程で中流階級 (middle class, middle rank) という用語がよく使われたが、それは反王妃側に立つ国王や貴族院という上流社会 (higher order) に対峙するものとして使われた。親キャロライン運動に加わった女性たちは、家族という私的領域の中で女性を守るだけでなく、女性の公共圏での活動、政治運動を支持する立場に立っていた。それゆえに親キャロライン運動を押し進めたのは、特定の階級の力ではなく、階級を越え女性の力も結集した「世論」 (public opinion) であった、とする。「世論」という用語は親キャロライン運動でしばしば使われており、ラカーもそれに注目しているが、ウォールマンによって改めて強調されたのである。^⑨

最後に、以上述べてきたこの事件についての解釈・見解をめぐる研究史上の変遷・転回を、広く近年の民衆政治史研究にみられる脱階級

的な転回傾向の凝縮例とみるロハン・マックウィリアムの見解に注目したい。彼は一九世紀の民衆政治史全体を視野に入れながら、階級と階級意識を歴史を動かすキー概念とみて民衆政治史を分析するE・P・トムズらの解釈を「古い分析」(old analysis)と呼び、近年台頭している「階級」をキー概念から外し、代わって民衆(people)、国民(nation)及びナショナリズム、ジェンダー、人間性などを軸にして歴史をとらえるポピュリズムの解釈を「新しい分析」ないし修正主義と呼ぶ。これは「ポピュリスト的転回」(populist turn)ともいわれるが、この解釈は歴史を動かす力として「世論」に注目させ、女性・ジェンダーへの目を開かせるなど、歴史像を豊かにするのに貢献した。マックウィリアムは次のように結んでいる。「キャロライン王妃事件に関する文献は、民衆政治「運動」について、ジェンダーやナショナル・アイデンティティを組み込んだ新しい思考方法を生み出す機会を例示している。資本主義的生産様式によってつくりだされた階級や不平等は、叙述から消え失せることはないが、しかしわれわれは階級社会の本質は理解すべきだとしても、社会関係がほかの要因によっていかに変わるかについて探求しなければならない。ポスト修正主義の目的は政治「運動」の社会史(a social history of politics)を提示することである。」

おわりに

キャロライン王妃事件は、ダンディ・派手な遊び人ですでにフィッツハーバート夫人と「結婚」しており、愛人ジャージー夫人も侍らせていた皇太子ジョージとキャロラインの不幸な結婚から始まった。キ

ャロラインは確かに庶民的感性の持ち主であり、率直、闊達で王室向きではなかったかも知れないが、「母は悪いのです。しかしもし父がこうまでひどく悪いことをしなかったならば、母はこれほど悪くはならなかったでしょう」という娘シャーロットが私教師に語った言葉^⑧は真実を語っている。事件は一七九五〜九六年の結婚とシャーロットの誕生の時期からの不和・いさかい、一八〇五〜六年の秘密委員会による妻の私生児を暴こうとする「細心の調査」、一三年の妻側の訴えが議会、新聞で大きな関心呼び、過去の事件の経緯が庶民院で公表され、白熱化した論議、一八〜一九年のキャロラインの大陸での行状を告発するミラノ委員会、二〇年の帰国後の王妃に不貞の罪で離婚を迫る国王の意を受けた貴族院の「裁判」、というキャロラインに対する苛酷な度重なる「虐待」の形で展開した。それゆえに王室内の私的な男女関係が庶民・大衆によって初めて問題にされ、二〇年にはそれが大衆運動として激発し、国民的大事件となったのである。

親キャロライン派は、公的人物ではウィッグ系議員の多数、改革派議員、ロンドン市長など、一般市民では急進主義者、商店主、店員、職人、労働者、多数の女性、青年層・学生、詩人バイロンなど知識人であり、中下層階級が多かったが、良識ある上流階級も含まれていた。彼らは皇太子ジョージを「古い腐敗した体制」(Old Corruption)のシンボル、キャロラインを「急進派のシンボル」とさえ見なした。運動が急進主義的性格をもったのはこのためであり、一七六〇年代のウィルクス派の運動から始まり、フランス革命期をへてナポレオン戦争後に高揚する急進主義運動の歴史の一齣と位置づけられることが多いのも同じ理由による。また弱い立場の王妃を支援するという庶民・民

衆の生得の価値観をも表しており、急進主義の歴史過程から逸脱したもののとは言えない。しかしそれは王族男女のスクヤンダルに基づく国主催の舞台で演じたものであり、舞台の消滅とともにその熱演もあつてなく閉幕した。それゆえに階級闘争の性格は薄く、一八一九年に弾圧を受けた民衆急進主義のエネルギーと中流階級改革派・功利主義者、知識人、及び多くの女性の要求と運動が広範に結集した、階級を越えた「世論」の力を示したものであった。

この運動では群衆行動にも請願署名活動にも数多の女性が参加し、性関係の二重規範を問題にし、父のジョージ三世夫妻をよきモデルにして、王族の男女関係についても中流階級のモラルを要求した。彼女らにとって王妃を擁護することは自らの立場と重ね合わせ、自己主張することでもあった。また職人・労働者急進派には夫に酷い仕打ちをされた妻の性的自由を主張するといった、性モラルの攻撃的な革新を説く動きもあり、さらに公共圏における女性の活動を讃える平民的急進主義も含まれていた。夫ジョージやキャロラインを扱った風刺画やビラが大量に流布し、事態がドラマ化され、シャリヴァリ行動に弾みをつけ、国王と貴族院による王妃弾劾の企てが進むにつれて興奮は頂点に達したのである。ジョージの世代の王族の乱れと王室の地位低下の危機的状況は、早死にした期待のシャロットに代わって、やがて「家族の中の国王」のイメージを定着させるヴィクトリア女王への道を拓くことになった。

「われわれ」あるいは「イングランドには王妃が必要」という訴えや「裁判」に招かれたイタリア証人への反発と反対デモが物語るように、親王妃派は民衆的ナショナリズムによっても支えられていた。

この事件をめぐる研究史の変遷・転回を、近年の脱階級的な転回傾向の凝縮例とみるマックウィリアムの見解は興味をひくが、それよりもこの事件が労働者・民衆運動と中流階級の運動が結び合う結節点に位置していたことに注目すべきであり、また王室と社会・民衆、ジェンダー・女性史、民衆文化、ナショナリズムの視点をも合わせてとらえなければならない。

註

- ① G. M. Trevelyan, *British History in the Nineteenth Century, 1782—1901*, London, 1922, p. 191.
 - ② Jonathan Fulcher, “The Loyalist Response to the Queen Caroline Agitations”, *Journal of British Studies* [JBS], vol. 34—4, 1995, pp. 481—482. フルチャーのはが後出の D. イムペン の agitation と同じである。
 - ③ William Hazlitt, “Common Places”, no. 23, 1823, in *The Complete Works of William Hazlitt*, ed. by A. R. Waller and Arnold Glover, 12 vols., London, 1904, vol. 2, p. 554.
 - ④ 優れた本格的研究の筆者ラカーの次の論文を参照。T. W. Laqueur, “The Queen Caroline Affair: Politics as art in the reign of George IV”, *Journal of Modern History*, vol. 54—3, 1982.
 - ⑤ キャロラインは「フランセス・ワットのキャロライン」唐名で呼ばれた王妃「ここに眠る」と棺に書けよう遺言を書いた。J. Nightingale (②参照), p. 305. メルヴィル (②参照) はこれを書名に採用。
 - ⑥ Dorothy Thompson, “Queen Victoria, the Monarchy and Gender”, 1989, in *ditto*, *Class, Gender and Nation*, London, 1993.
- 古賀訳「ヴィクトリア女王—君主制と女性(ジェンダー)」『歴史学研究』六三三号、一九九二年。同様な意見はベッカランも述べている。Iain McCalman, *Radical Underworld, Prophets, Revolutionaries and Pornographers in London, 1795—1840*, Cambridge, 1988, Oxford

paper ed. 1993, p. 162.

- ⑦ E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, London, 1963, revised 1968, pp. 778—779.

- ⑧ ditto, "The Very Type of the 'Respectable Artisan', *New Society*, 48 (May 3, 1979), pp. 275—277. I. J. Prothero, *Artisans and Politics in the Early Nineteenth-century London*, *John Galt and his Times*, Folkestone, Kent, 1979, pp. 132—155.

- ⑨ 不幸な結婚 事件の概略とこの結婚にまつての史料の整理は著者の著書『Flora Fraser, *The Unruly Queen, The Life of Queen Caroline*, London, 1996. Lewis Melville, *An Injured Queen, Caroline of Brunswick*, 2 vols. London, 1912. W. Dodgson Bowman, *The Divorce Case of Queen Caroline, An Account of the Reign of George IV and the King's Relation with other Women*, London, 1930. Roger Fulford, *The Trial of Queen Caroline*, London, 1967. John Stevenson, "The Queen Caroline affair", in *London in the Age of Reform*, ed. J. Stevenson, Oxford, 1977. E. A. Smith and Ernest Anthony, *Queen on Trial, the Affair of Queen Caroline*, Dover, 1993. Christopher Hibbert, *George IV, Prince of Wales 1762—1811*, London, 1972. ditto, *George IV, Regent and King 1811—1830*, London, 1973. E. A. Smith, *George IV*, Yale U. P., 1999. J. B. Priestley, *The Prince of Pleasure and his Regency 1811—20*, London, 1969. 邦語に訳されたものは Linda Colley, *Britons, the Forging the Nation 1707—1837*, Yale U. P., 1992. 川北稔監訳『イギリス國民の誕生』名古屋大学出版会、二〇〇〇年。森護『英国王室史話』大修館書店、一九八六年。君塚直隆『英国王室と民衆—メーソン事件と國制のゆくえ』『歴史学研究』七〇六、一九九八年一月。香田三郎『王制・新聞・世論—「キャロライン王妃事件」のメディア史上の位置—』『東京経済大学人文自然科学論集』一〇五、一九九八年二月。
- ⑩ 二人の署名入りの結婚証明書は現存する。
- ⑪ *The Times* [T], 19 January, 9, 13 March, 6 April 1795, p. 2. *The Annual Register* [AR], 1795, Chronicle, pp. 13—14. Lewis Melville,

pp. 33—34.

- ⑫ T, 9 April 1795, p. 2. AR, 1795, pp. 15—16.

- ⑬ F. Fraser, pp. 64—69.

- ⑭ T, 8, 9, 11, 12, 17 January 1796, p. 2. Fraser, pp. 74—75. 邦語訳は Arthur Aspinall, ed., *The Correspondence of George, Prince of Wales, 1770—1812*, 8 vols. London, 1963—71, vol. 3, p. 132.

- ⑮ *Hansard's Parliamentary Debates* [HPD], 1st series, vol. 24 (1813), 1117—1121. W. Dodgson Bowman, pp. 125—32.

- ⑯ HPD, *op. cit.*, 982—985, 1106—1155, vol. 25 (1813), 116—125, 142—200, 207—227, 269—284.

- ⑰ W. D. Bowman, pp. 180—184, Fraser, p. 252 ff.

- ⑱ I. Melville, pp. 305—311.

- ⑲ T, 6, 7, 13, 17 June 1820. メーソン夫人の結婚をめぐっての事件は *Cobbett's Weekly Political Register*, 10 June 1820.

- ⑳ HPD, new series, vol. 1 (1820), 886—902, vol. 2, 210—216, 612 ff. vol. 3, 783 ff., vol. 4 (1821), 65. *The Black Dwarf*, vol. V, no. 21, Nov. 1820, pp. 717—724.

- ㉑ T, 8, 9, 13, 15, 16 Aug. 1821. I. Prothero, pp. 132—155. J. Nightingale (参照), p. 288 ff.

- ㉒ トリニティ・メーソン夫人の所蔵書は、キャロライン王妃の項に分類されている単行本、小冊子など三十八件ほどのものである。その中に王妃自身の手記や著書が含まれており、その中には一八二〇—二二一年の刊行のもの。次のナイチンゲールの書物は近年再版された。Joseph Nightingale, ed., *Memoirs of her late Majesty, Queen Caroline*, 3 vols. London 1820—21, a new edition by Christopher Hibbert, *Memoirs of the Public Life of Queen Caroline*, London Folio Society, 1978. 雑誌では *Cobbett's Weekly Political Register* (1802—35), T. J. Wooler の *The Black Dwarf* (1817—24), Leigh Hunt の *The Examiner* (1808—25) をはじめ多くのものが、親王妃の論陣を張った。キャロラインの「裁判」が行われた貴族院の一八二〇年の審議記録 (HPD, 前田) は、異常な勢いで膨らんでいる。

- ② Lady Charlotte Bury, *The Court of England under George IV, founded on a Diary interspersed with letters written by Queen Caroline and various other Distinguished Persons*, 2 vols., London, 1896 (1st edn. 1838). 皇太子妃最初の日記と女王カロリーンの手紙など。彼女の入浴、食事、睡眠の状況から彼女の生活の姿が窺われる。『その生活の日記』、その生活の日記。The Duke of Buckingham and Chandos, *Memoirs of the Court of George IV, 1820–1830, from Original Family Documents*, in 2 vols. London, 1859. キングジョージ4世の私生活の日記と手紙の断片。『王太子妃の日記』、王太子妃の日記。
- ③ Arthur Aspinall, ed., *The Letters of King George IV, 1812–1830*, 3 vols. Cambridge, 1938. ditto, *The Correspondence of George, Prince of Wales, op. cit.*, Shane Leslie, *Mrs. Fitzherbert: a Life chiefly from unpublished sources*, London, 1939.
- ④ Graziano Paolo Clerici, *A Queen of Indiscretion, The Tragedy of Caroline of Brunswick, Queen of England* (translated from Italian by Frederick Chapman), London, 1907. Howard Cox, *The Stranger in the House: A Life of Caroline of Brunswick*, New York, 1940. Joanna Richardson, *The Disastrous Marriage: A Study of George IV and Caroline of Brunswick*, London, 1960.
- ⑤ F. Fraser, *op. cit.* E. A. Smith and E. Anthony, *op. cit.*
- ⑥ Graziano P. Clerici, *op. cit.*, Introduction Ixxxvii. 女王ジョージ4世の日記と手紙の断片。
- ⑦ Edgell Rickword, selected and annotated, *Radical Squibs and Loyal Ripostes, Satirical Pamphlets of Regency Period, 1819–1821*, Bath, Somerset, 1971. Iain McCalman, *op. cit.*, pp. 162–177. Kenneth Baker, *The Kings and Queens, An Irreverent Cartoon History of the British Monarchy*, London, 1996. 政治諷刺画『英皇の滑稽史』、政治諷刺画『英皇の滑稽史』。河口書房新社、一九九七年。
- ⑧ I. J. Prothero, *op. cit.*
- ⑨ T. W. Laqueur, *op. cit.*, pp. 417–439.
- ⑩ Ibid., pp. 439–464.
- ⑪ Tamara Hunt, “Morality and Monarchy in Queen Caroline Affair”, *Albion*, vol. 23, 1991, pp. 697–722.
- ⑫ L. Davidoff and C. Hall, *Family Fortunes: Men and women of the English middle class, 1780–1850*, U. of Chicago Press, 1987, pp. 151–154. D. Thompson, *op. cit.*, p. 171ff.
- ⑬ Cf. Craig Calhoun, *The Question of Class Struggle, Social Foundations of Popular Radicalism during the Industrial Revolution*, Oxford Blackwell, 1982, p. 115 etc. cf. J. Ann Hone, *For the Cause of Truth, Radicalism in London 1796–1821*, Oxford, 1982, pp. 307–319.
- ⑭ Anna Clark, “Queen Caroline and the Sexual Politics of Popular Culture in London, 1820”, *Representations*, no. 31, 1990, pp. 47–68. ditto, *The Struggles for Breeches, Gender and the Making of the British Working Class*, U. of California, Berkeley, 1995, p. 172.
- ⑮ Jonathan Fulcher, *op. cit.*
- ⑯ Dror Wahrman, “‘Middle-Class’ Domesticity Goes Public: Gender, Class and Politics from Queen Caroline to Queen Victoria”, *JBS*, vol. 32–4, 1993, pp. 399–409.
- ⑰ Rohan McWilliam, *Popular politics in nineteenth-century England*, London, 1998, “Reinterpreting the Queen Caroline Case”, pp. 7–13, 21–29 ff., 101. James Epstein, “The Populist Turn”, *JBS*, vol. 32–2, 1993, pp. 177–189. ホーナー・エプスタインの関心する政治的変遷。
- ⑱ F. Max Muller, ed., *Memoirs of Baron Stockmar by his Son*, tr. from German, 1873, vol. 1, p. 2. cited in D. Thompson, *op. cit.*, p. 166.
- ⑲ A. S. Foord, “The Waning of the Influence of the Crown”, *English Historical Review*, vol. LXII, 1947, pp. 484–507.